不登校生徒改善例について

【葛飾区立 A 中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、現在第 3 学年。入学当初から休みがちで第 2 学年ではほとんど登校できなかった。母も体調が悪く連絡はほとんど取れない。小学生の妹を兄本人が学校に連れていくことがあり、それにより安否確認ができていた。

具体的な取組

小学生の妹の欠席が増えてきたこともあり、小・中で連携して双方の SSW、ケースワーカー、管理職、特別支援コーディネーターによるケース会議を開いた。そこから双方の情報共有により、祖母との連絡が取れるようになり、何回かは祖母とともに登校することができた。

第 3 学年になってから、校内適応指導教室へ登校する日数が増えた。これは進路を意識した結果であると考えられるが、適応指導教室があるために、担任が授業中であっても気軽に登校し、担任が授業を終えるまでの居場所となっている。

担任が生徒の状況を共有フォルダに記入することにより、校内委員会で生徒の状況を共有しやすくなった。そのことにより、当該生徒からの連絡や登校に際し、どの教員でも対応することができるようになり、生徒や保護者も安心して学校と連絡が取れるようになった。

その日の欠席者や遅刻、早退者の情報を各学年のホワイトボードに記載することにより、当該生徒がいつ登校したかがどの教職員でも把握できるようにした。

そのことにより、登校している生徒にすぐに対応することができるようになった。

成果

不登校対応加配の教員が配置されたことにより、担任一人一人の負担が軽減された。実際、上記生徒との連絡は今までよりも頻繁に行うことができ、登校日数も昨年度は 5 日だったことに比し、今年度は 11 月の段階で 9 日越えている。

課題

不登校生徒が多く、校内適応指導教室の受け入れ許容範囲を超えている。場所と人員の工夫が必要である。

校内適応教室の開設について

【葛飾区立Ｂ中学校の取組】

不登校生徒の状況

・対象生徒は、学校での居場所があれば登校できるようになることが確認できた。
・デジタル機器を活用して不登校生徒の登校支援ができた。
・学校支援員との人間関係の構築が登校再開に繋がった。

具体的な取組

校内適応教室

個別学習スペースを確保し、Ｚoom学習や自学自習に対応している。

校内適応教室

不登校生徒だった３年生は、校内適応教室の開設により毎日登校し、高校受験に向け個別指導を受けている。

校内適応教室

居場所づくり、絆づくりとして、カードで遊んだり
塗り絵をしたり
リラックスしたり
して、滞在できる
空間となっている。

校内適応教室

安心して過ごせる空間となるよう、入り口には衝立を置き教室内は暖色で統一して明るい空間を演出している。

成果

不登校加配教員の配置により、校内適応教室の開設と順調な教室運営に多大に貢献した。

その結果、３年生では４名、２年生では１名、１年生では５名の生徒が利用して登校を継続している。特に３年生は進路決定に向け励んでおり、大きな成果である。

課題

校内適応教室の利用者の増加に伴い、学習スペースの確保が課題である。

本校の適応教室について

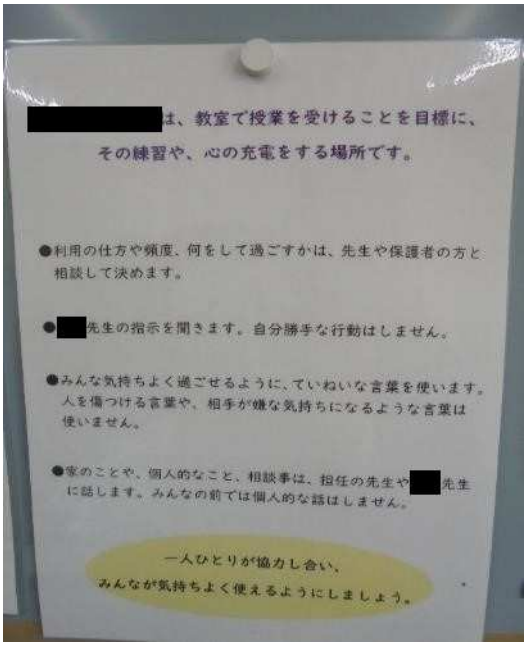
【葛飾区立Ｃ中学校の取組】

不登校生徒の状況

家庭生活が困窮して、登校に至らない生徒に加え、発達障害や起立性調節障害などと診断される生徒も多い。このことから子供家庭支援センターや福祉課、医療機関等の関係機関と連携して対応するケースが増えている。

具体的な取組

本校では、校内適応教室を設置し、スクールカウンセラーを中心とする校内委員会で入室の可否を判断した上で、不登校傾向の生徒には、休憩、ソーシャルスキルトレーニング、自学自習と、段階的な支援を行い、その上で、参加できる授業に参加させ、教室への復帰を目指している。



成果

集団生活になじめない生徒に声をかけて、別室で１日を過ごさせる支援を校内適応教室で行うことができた。これにより、本来不登校になってしまう生徒も毎日学校に登校できるようになっている。

課題

校内適応教室を利用する生徒が増える傾向があるので生徒の人間関係、個人的な悩みなどに細かく対応しきれないことがある。

校内適応教室を活用しての加配教員の取組について
【葛飾区立Ｄ中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、ほとんど登校できていない生徒たちである。昨年度より本校では校内適応教室が新設され、教室に入れない生徒たちが登校できるようになってきている。校内適応教室では、自学自習の際に加配教員や学校支援指導員が学習指導を援助したり、体力向上の活動を援助したりしている。また、悩み相談を行い、ＳＣへつなげたり、外部機関を紹介したりして心の安定を図っている。

具体的な取組

毎月、生徒アンケートを行い、その結果より生徒の悩みや意識・思いをＳＣや特別支援教育コーディネーターと連携して分析し、各学年、学級、特別支援委員会に報告している。

校内分掌や学年分掌など様々な業務を担当することにより学級担任の負担を軽減し、担任による家庭連絡、家庭訪問の実施時間を増加させている。

学校支援指導員と連携し、様々な行事の紹介とその参加を呼び掛けている。その結果運動会や文化祭に別室登校し、友人の活動を見学できる生徒が増えてきた。

校内適応教室において学校支援指導員と連携し、学習指導や体力向上の活動を援助したりしている。また、不登校生徒に役割を与え、自己肯定感・自己有用感をもたせ、心の安定を図っている。

成果

加配教員の働きかけにより、校内適応教室に参加できる生徒が増えてきている。また、その生徒の中には 2 学期になり給食や学活の際に教室に入ることができる生徒も増えている。

課題

校内適応教室に参加できていない生徒への働きかけ、登校している生徒の登校日数の増加、教室復帰が今後の大きな課題である。

不登校加配教員の役割について
【葛飾区立Ｅ中学校の取組】

不登校生徒の状況

無気力や不安、生活リズムの乱れから、登校できなくなるケースが多い。

１３日以上欠席した生徒については、支援会議で対応を検討し「生徒支援シート」を作成して毎月区教育委員会に提出している。

具体的な取組

〇支援会議を週１回開催し、支援策を検討している。不登校加配教員が企画・調整及び運営を行っている。（参加者は、管理職、不登校加配教員、生活指導主任、養護教諭、特別支援コーディネーター、各学年１名、ＳＣ、学校支援指導員、特別支援教育専門員）会議内容を全教職員に周知し、校内における協力体制を構築している。

〇いじめアンケートを年３回、学校生活アンケートを年２回実施している。
不登校加配教員がまとめて、全教職員に周知する。アンケートの回答内容によっては、学級担任等が個人面談を実施している。

〇生徒理解をテーマにした校内研修会を年３回実施している。不登校加配教員が企画・調整及び運営を行い、学級担任が、生徒個々の特性や状況、支援方法を報告し、全教職員で共有している。

〇不登校生徒１人１人の「生活支援シート」を作成し、月１回更新している。不登校加配教員がまとめて現状を分析し、全教職員に周知して共通理解を図っている。

成果

全教職員で不登校生徒の情報を共有することができ、校内における協力体制が構築できている。ＳＣやＳＳＷ、区適応指導教室、子ども総合センター等との連携もスムーズにできるようになった。

課題

協力を得られない家庭に対して、関係機関等と連携しても改善できない事例がある。

不登校生徒への対応について

【葛飾区立Ｆ中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、家庭環境と学力不振によるものが大部分を占めている。例えば、スマートフォンの過度な使用によって生活のリズムが乱れ、親子関係が悪化してしまったり、学習課題に取り組めない自分を受け入れられずに自己嫌悪に陥って引きこもり状態になってしまったりしている。学校だけでは対応が難しいケースが増えているので、積極的に関係機関と連携して対応している。

具体的な取組

・不登校生徒の情報管理

不登校対応加配教員が、該当する生徒の情報を一括管理するシステムを整備し、職員の情報共有や教育委員会への報告などがスムーズに行われるようになった。特別支援教育コーディネーターの負担も軽減されている。

・別室指導での生徒の居場所の確保

毎週月曜日には指導員がつき、学習支援を行っている。その他、クールダウンなどにも使用する。

・ＳＣやＳＳＷとの面談

ＳＣと対象生徒を積極的につなぎ、不安解消のための環境調整を行っている。家庭にも配慮が必要な場合は SSW や子ども総合センターとも連携して家庭訪問を行うなど対応している。

・保護者のケア

生徒のケアだけでなく、その保護者のメンタルケアが必要なケースが増えているので、担任等もカウンセリングの基礎知識を身に付けられるよう研修を実施している。また、場合によっては学校と主治医が連絡をとり、その家庭への対応を検討している。

成果

・生徒と連絡を取る手段が増えたので学校での様子を伝えたり、家庭での様子を聞いたりすることができた。

・保護者の緊張や不安が解消されることで生徒にもよい刺激を与えることができる。

課題

・保護者の理解や協力に困難さがあり、適切な支援や対応を見出すまでに時間を要する。

不登校生徒の未然防止と早期復帰について
【葛飾区立Ｇ中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、令和４年１０月現在３６名で、主として本人に係る要因で不登校となる生徒が多い。新型コロナウイルス感染拡大予防で少しでも体調がすぐれない場合には欠席をするように指導していたため、欠席日数が増加する傾向がある。要因では学業不振やコミュニケーションがうまく取れないこと、精神的不調などにより欠席が増加する傾向が見られる。また、長期化するコロナ禍等により家庭環境が不安定になり保護者の目が行き届かなくなることで欠席が増える傾向も見られる。

具体的な取組

登校支援会議を週に１回実施している。不登校傾向の生徒の情報共有をし、SC のアドバイスを受け、生徒支援の具体的方法を協議した。保護者へのカウンセリングも随時行い、学校と家庭の協力体制を強化して、不登校の未然防止に取り組んでいる。

近隣の小学校との連携を強化し児童・生徒情報を共有し、入学前に保護者や本人との面談を行い、登校しやすい環境を整備した。新学期及び夏休み明けには、生徒１人１人と担任等との面談を行い、個々の生徒のよさを伝え、悩みを聞き、相談しやすい環境を作っている。

教室に入りづらい生徒に、ゆったりと過ごせるスペースを整備した。校舎棟から離れた体育館棟の仮設校内適応教室や保健室、カウンセラールーム、校長室など生徒が入室しやすい環境を提供して支援している。また SSW や児童相談所、子供総合センターとともに家庭環境に起因する問題の解決を図っている。

感染予防に留意しながら学校行事を実施して生徒相互の絆づくりを行い、学習、行事やスポーツに励み魅力ある学校づくりに努めている。

成果

週に１回の登校支援会議を開催し、学期に１回講師を招き校内研修会を実施することで、生徒の居場所や生徒相互の絆をつくり、生徒の支援につながった。仮設校内適応教室の成果が認められ、次年度より常設の校内適応教室となる。

課題

コロナ禍の長期化により増加している不安定な家庭環境に対しても関係機関との更なる連携により有効な対策を行うこと。

不登校生徒の定期的な登校を継続させる取り組みについて
【葛飾区立Ｈ中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、２年生の２学期に他校から転入した。小学校５年生のとき、学校に行くのが面倒になり不登校になった。前の中学校でも不登校の状態が続いていた。転入後１週間ほど登校したが、続かなかった。

具体的な取組

スクールカウンセラーとの定期的な面談を勧めたところ週１回の登校ができるようになった。その後少しずつ学校での滞在時間を延ばしていき、東京ベーシックドリルを活用し、勉強にも取り組んだ。

勉強は苦手であり、週一回の登校から足が遠のくことが増え、打開策として音楽科教員によるピアノ演奏にも取り組ませ、登校を継続させた。

ギターも弾きたいというので毎回ピアノの指導の後、ギターの練習を取り入れた。

別室指導中に進路の話をしているとき、唐突に「教室に入ろうと思うんです、今教室に入らないと高校に行っても教室に行けないと思うから」と訴えてきため、担任からクラスに給食の時に来る旨を事前に伝え、スムーズに教室に入ることができた。

成果

スクールカウンセラーとの面談を続け、定期的に連絡を取った。勉強が苦手な生徒であったが、音楽を取り入れることで再度登校を続けさせることができた。保護者とは担任が定期的に連絡を取ってきた。進路は本人が希望する高校に進学することとなった。

課題

このケースでは授業時数の少ない音楽科教員による対応だが、他教科の教員では授業数が多く難しいところがある。